

学研都市の30年後を 考えること



国際高等研究所所長
長尾 真 氏

けいはんな学研都市が整備され始めてから30年が経過した。純粋な研究開発だけでなく、一部製造活動を行う研究開発型産業施設の立地も認められるようになって、今日では128の施設*が活動するまでに成長してきて、活力がより一層出てきている。

ここで大切なことは、これまでの30年間を振り返り、次の30年を考える事だろう。例えば、学術研究・先端技術開発の理想都市であるとともに、文化的で住みやすい田園的・林間的都市を目指すにはどうすればよいかといった目標と、そこに到るプロセスをしっかりと描くことである。

30年先ということになれば、地球資源の枯渇、人口や環境問題などがより深刻となっていて、これまでのような進歩発展史観は成り立たず、資源の循環的、効率的な利用、定常経済社会といった方向を目指さざるを得なくなるだろう。そういった将来の世界に軟着陸してゆくための科学技術や経済・産業・社会活動は如何にあるべきかについて真剣に検討する必要がある。また、国や民族間の対立抗争とそれにかかわる軍事産業といった人類の幸福にとって全く反生産的なことを無くし、お互いに平和的共存を目指すことが必須となるが、それはどうすれば実現できるかといった人間性や思想などが深くかかわる難問にも直面する。

私たちの研究所ではこういった非常に難しいが挑戦し甲斐のある問題を取り上げ、日本の英知を集め学際的に議論する活動を始めた。2、3年先には社会の多くの人たちの共感が得られる提案を出し、国内はもちろん世界にアピールし、共感してくれる外国の機関、シンクタンクなどと協働し、その活動の輪を世界的に広げてゆきたいと思っている。

※2015年7月末現在